

やきもの用語

用 語	解 説
あいもん あかえ	(和え物) あえ物も盛る焼物。形は湯呑みに似ているがふちが反っている。 (赤絵) 赤色を主調とした多彩の絵模様陶磁のこと。本焼きした器の釉の上に、赤、緑、黄、紫、青などの上絵具で文様を描き、専用の上絵窯で焼きつける。上絵、または色絵ともいう。
あげてみ	(挙げて見) 登窯の焼け工合は、窯の中の火色と焼物の色で判断したが、確かめるための取り出し用焼物。最も火度の低い所に3、4個おいた。
あげてみざお あげてみざま あぜ	(挙げて見竿) あげてみを取り出す鉄製の竿先端が二またになっている。 (挙げて見狭間) あげて見を窯の中から取り出す時に必要な穴窯の一番低い所にある。登窯の正座(し行に解説)と火床(ひ行)との間を仕切ってあるあぜ
あんこうがま いっかんじん	(安光窯) 登窯で「焚起こし」に続く最下位の窯。最も小さい。 (一閑人) 皿、鉢、盃などの口造りの一端に人形がついているもののこと。閑人が井戸を覗いているようなのでこの名がある。中国明時代(1368~1644年)の青磁や染付磁器によくみられる装飾で、両側に人形があるものは二閑人という。
いときり	(糸切り) 回転する轆轤から器物を切り離すとき、撚糸で引き切ること。またはそのようにして切り取った高台部のこと。底部が糸の回転によって渦巻き文となる。
いとぞこ	(糸底) 轆轤成形の際、糸で底を切り離れたやきものの底のこと。本来は糸切りした底を指す名称だったが、糸切りの痕の見えないもの、さらにやきものの底すべてを指すようになった。糸尻ともいう。
いらぼ	(伊羅保) 朝鮮半島でつくられた高麗茶碗の一種。鉄分の多い小砂まじりの荒い土に薄い釉薬がかかり、肌がこげていらいらいぼいぼした感じがするのでこの名が起こったといわれる。江戸時代(1603~1867年)初期にわが国の注文に応じてつくられたいわゆる御本茶碗が多い。
うわぐすり	(釉薬) 焼物に光沢を出すため、全体にかける薬、焼き上ると透明なガラス質となる。窯元では調合に多少の相違があり秘伝とした。
えぐすり	(絵薬) 素焼した焼物に描く顔料。鉱石、金属を原料として作り色は種々あった。窯元で多少の相違があった。唐絵薬は最高品とされた。
おき おきあげ	薪やたたらぎを焚いて焰の出なくなった火 (おき挙げ) 窯の中のおきを取り出す道具十能の大きい物で、先は鉄、柄は木で作ってある。
おきかき	おきをかき出す道具、素焼窯で用い、焼き上ったのち、おきを外へかき出して水をかけ炭とした。
おくづみ	(奥積み) 登窯で火度が最も弱い奥の方へ積む焼物。八荷入、六荷入といって、天草石に、火度の弱い三股石を多く入れた陶土で作った。四荷入は中積用、二荷入は火前積み用とした。
おしべら	(押篋) ろくろ細工に用いる「へら」。木目のつまった木でつくる。焼物の形によって種々の型があった。
おち	成型したが破損したものの、けずりくずなどを、陶土に再生するために蓄える設備、通常2m x 2m x 1mほどの大きさでモーロイシで築いてあった。
おにわやき	(御庭焼) 江戸時代、諸藩主の中には、御用窯をつくって焼成させる例が多かったが、とくに城内や邸内に築用し、より好事的になったものを“御庭焼”と称する。有名なものに紀州偕楽園焼、尾張御深井焼、水戸偕楽園焼、備前後楽園焼などがある。
おんざん	(温散) 登窯で下段の焰が上段へ通ずる狭間。一軒の窯には下段より通ずるもの、上段へ通ずるものと上・下にあいていた。通風と熱効率を兼ねている。
かがみ かきいた	ロクロの上面部。ここへ陶土をのせて成型する。 (垣板) 本窯で棚板積みの場合火床の焰が直接焼物に当らぬようにする垣。強い耐火土で作ってある。
かきふで かけわけ	(描筆) 素焼に染付する絵を描く筆。大小数種ある。 (掛け分け) 二種類以上の色釉を分けて掛け流す施釉方法。

用語	解説
かさねやき	(重ね焼) 器物をいくつも重ねて焼成すること。その際、器物の ^{ようちやく} 熔着を防ぐために目砂や貝をはさむ。それが目跡となって器に残る。
かたくち	(片口) 台所用具の調理用具の一種で、鉢の一方に注ぎ口がついているもの。油、酒、醤油などを口の小さな容器に移しかえるときに用いる。塗りものややきもので作られ、向付や鉢として使われることも多い。
かぶとばち	(兜鉢・甲鉢) 兜の鉢(頭を入れる部分)に似た形をした鉢。反りをもった大きな縁があり、伏せると兜の形に似ているのでこの名がある。
からうす	(唐臼) 水を利用してつく臼。陶石、釉薬原料を粉碎した。これが沢山なければ窯は焼けなかった。
かわくじら	(皮鯨) 茶碗や皿の縁に鉄釉を掛けて焼くと、茶褐色に焼き上がる。その色が鯨の皮身に似ているところからつけられた名称。唐津にその遺品が多い。
かわこぎ	陶土、釉薬、月砂などを水漉しするときの道具。十能を大きくしたようなもので先は鉄製で、6尺ぐらいの木の柄がついている。
かわせばま	(はま)ともいう。焼物を直接のせて焼くもの、陶土でつくり表面に月砂を塗って融着を防いだ
かなな	なま乾きの生地の外側けずりや高台けずりに使う。鋼鉄製の薄板、ヤスリをかけて鋭くする。
かんにゅう	(貫入) 釉面にあらわれたひびのこと。素地と釉薬の収縮率の違いから生じる。ひびが大きいものを氷裂文、細かいひびがたくさん集まっているものを魚子文という。貫入は欠点とされることもあるが、意図的に文様化したものもある。
かんも	ロクロの心木の当る所にはめ込んである陶器。四角で中央にくぼやがあり周囲はくさびで固めてある。
きぬたせいじ	(砧青磁) わが国の茶人による中国青磁三分類の一つ。中国南宋時代(1127~1279年)に龍泉窯で焼かれた粉青色の青磁で、最も上手の美しい青磁として珍重された。
きりこうだい	(切高台) 高台の一部が1~数ヶ所切り込まれているものをいう。背の高い高台に見つけられ、江戸時代(1603~1867年)中期以降の萩茶碗や高麗茶碗などの一部にこの手法がある。
きりよま	(切りよま) ロクロで成型し切り離すときの糸。稲の穂首を小さくさいてより合せたもの、馬の尻毛をよったものなどを使用した。
きんさい	(金彩) 金で上絵付けをしたやきもの。金と他の合金を混ぜたもので彩画し、通常の上絵付けよりもさらに低い温度で焼きつける。
きんさい	(錦彩) 赤、緑、紫、黄、藍などの色絵の上にさらに金彩を彩色したもの。
ぎんだい	(銀台) 絵薬を微粉末にするための御影石製のひき臼
きんつぎ	(金つぎ) 破損した陶磁器を漆を使ってつくり、その表面を金で覆うこと。一見すると、金でついだように見える。
きんよう	(釣(均)窯) 中国宋時代(960~1279年)の河南省の名窯の一つ。青磁釉が白濁した、ラベンダー彩が特徴である。
くつがた	(沓形) 口縁部に不規則なせばまりがあるもの。茶碗や鉢によく見られ、口縁部の下に一段くびれがあるのが普通である。蹴まりに用いる沓に似ているところからつけられた名称。
くらわんかぢゃわん	(くらわんか茶碗) 江戸時代(1603~1867年)中期以降、淀川を往来する船客に酒食を売った「くらわんか船」の商人たちが用いた厚手の染付茶碗。ほとんどが末期伊万里染付の下手な作品だった。船の揺れで倒れないように高台が重い。
くるかん	登窯の最上段の窯。その上に余熱で素焼する「ふかせ窯」があった。
くろみ	焼成するとき、火廻りが悪く窯変したもの、釉薬が黒ずんでいる。
けんすい	(建水) 茶湯点前の時、茶碗をすすいだ湯や水を捨てる器のこと。水こぼしもいう。
こうけ	火廻りが悪くて釉薬に光沢が出ず、ガサガサとなったもの
こうごう	(香合) 香料を入れる蓋つきの器のこと。茶事では炉の炭手前に使用される。漆器、陶磁器などいろいろある。珍味入れの容器などに転用されたりもする。
こうだい	(高台) 茶碗、鉢、椀などの足の部分にあたる基台のこと。輪高台、切高台などさまざまある。糸底、糸尻ともいい、光台、香台とも書く。

用語	解説
こうらいせいじ	(高麗青磁) 朝鮮の高麗時代に焼かれ、高麗朝滅亡とともに衰退した優れて美しい青磁。中国の宋の青磁の影響のもとに発展したが、朝鮮独特の味わい深いものとなっている。青磁釉の下に白土や黒い土を象嵌して焼いた“象嵌青磁”、また、酸化銅を配し辰砂の紅を発色させたもの、釉下に鉄で絵を描いた“鉄絵青磁”などがある。
こうろ	(香炉) 中に灰を入れて香をたくのに用いる容器。中国、朝鮮、日本で多く作られ、陶製、銅製などいろいろな形がある。元来は仏具だったが茶道や香道などで用いられる。
ごさい	(五彩) 中国明代(1368~1644年)に完成した上絵付けのこと。日本では赤絵または色絵という。
ごす	(呉須) 酸化コバルトを含んだ鉱物の名で、染付の顔料。中国では青花とか青華ともいう。呉州とも書き、広い意味で顔料や絵具全般を指すこともある。さらに呉須手とよばれる粗雑な染付磁器を指すこともある。
コバルト	青めの着色剤として広く用いられる。染付などに用いる呉須は、天然コバルトのことである。コバルトの発色の優劣により、作品の良し悪しが決まるので、さまざまにコバルトの種類を選び、混ぜものなどをして研究している。
ごほんで	(御本手) 桃山時代から江戸時代(1573~1867年)にかけて、わが国から朝鮮に御手本を示して釜山あたりで作らせた茶碗のこと。御本茶碗ともいう。これらの茶碗には、胎土の成分から淡い紅色の斑点があらわれることが多く、この斑点を御本とよぶこともある。
ごむはん ごろいた	(ゴム判) 絵・だみを能率化するため、用いるゴム製の判 蹴口クロは上下2段になっていて、下段を蹴って廻す。下段の中央にはめこんで心棒との摩擦を最小限にする役目のもの
さびえ さらいた	(錆絵) 鉄絵のこと。京焼でいう。鉄釉で下絵付けしたもので、黒ないし褐色に発色する。 (皿板) 焼物の成型、運搬に用いる6尺ぐらいの板、成型、乾燥、釉薬かけ、窯への運搬など全般的に用いられた。
さんさい	(三彩) 素地に直接、緑、茶、白、藍などの低火度釉をかけて焼いた軟陶。必ずしも3色とは限らず、2~4色のものが多い。中国では唐三彩、日本では奈良三彩が有名である。五彩と違い赤の絵具や青の下絵はない。
しいの	陶土づくり、釉薬づくりに粉末を選別する「ふるい」陶石、石灰などを水ごしする時の「しいの」は目がきわめて小さいのを指した。
しがと	天秤棒でかついで売り歩く陶器商人。
しきこ	畳を6つに細分した敷物、土間、板間に座るときに使用した。
じきろう	(喰籠) 食物を盛って出す、大ぶりで平たい蓋つきの器物。円形や角形のものがあり、重層になっているものもある。漆や竹製品にも見られるが伊万里焼など陶磁器にも多い。
しの	天秤積みの場合「ぬけ」と共に中心になって支える陶具。
しのぎ	素地の装飾技法の一つ。口作りから胴、腰にいたるまでを、篋で縦にえぐるように削ったもの。境目の稜線を際立たせ、これを文様とする。
しゅうえん	窯に薪を焚くときに出る黒い煙。
しょうざ	(正座) 登り窯で焼物を積む場所全体。
しょくえんゆう	(食塩釉) 塩釉と同じ。
しょんずい	(祥瑞) 中国明末期の崇禎年間(1628~1644年)前後に景德鎮民窯で作られた上手の染付磁器。あざやかな紺青で精緻で細かい文様がびっしりと描き込まれているのが特徴。底に「五良大甫呉祥瑞造」の銘のあるものもある。水指や茶碗といった茶器は、日本からの注文で作られた。
しろげしょう	(白化粧) 鉄分を多く含んだ有色土の素地の表面に白色の化粧土を薄く掛け、外観を白くみせること。その上にさらに着色することもある。白掛、化粧掛ともいう。
しんかきふで	(心書き筆) 最も細い線を綿密に描く筆。狸の毛で絵書職人は自分で作ったという。
しんぎ	(心木) ロク口を支えている中心の棒、ユスの木を用いた。
すいてき	(水滴) 硯に水を入れるのに使う小型の水指のこと。硯滴、水注ともいう。または茶席で用いる水指も水滴ということもある。
すじぐるま	(筋車) 筋引きや、刷毛塗りのとき用いる小さい手ロク口。
せいはいくじ	(青白磁) 白磁土の上に青磁と同じように、少量の鉄分を含む灰釉を掛けて青く発色させたもの。白磁の一種。影青ともいう。

用語	解説
せとぐろ	(瀬戸黒) 瀬戸黒茶碗のこと。鉄釉を掛けた茶碗を焼成中の窯から引き出して、急冷させることによって黒色にすること。引出黒 <small>ひきだしくろ</small> ともいう。
そこつち	(底土) 成型途中の破損物、けずりくずなどの陶土、再製して用いた。
たきおこしがま	(焚き起こし窯)「火起こし窯」「灰あんこう」ともいう。「あんこう」の下に附設しており、胴切り(と行)などを詰めて焚き「あんこう」へ熱を送った。焼物は積まれてない。
たたきばま	陶土(下物)を団子にしてたたいて作ったはま、上物には用いなかった。
たたら	石膏型に打ちつけて成型するときの陶土、あらかじめ、石膏型に合わせて厚み、大きさを切っておく。
たたらぎ	本登窯用の松材のまき、長さ1尺3寸前後、竹輪に締めて運搬した。
だちん	(駄賃) 元来は馬による荷運び賃であったが、後には人力による運搬費にも使われた。
たて	(盾) 正座に積まれた焼物に直接焰が当たらずに火床に近く立てて垣をするもの、高さ3尺近くで耐火度の強い山土で作られた。
たないた	(棚板) 窯積み用の1尺5寸ぐらいの正方形の板。耐火土で作った。
だま(だば)	(駄馬) 荷運び用の馬、陶土、山土、山からの薪などは馬の背で運ばれた。
だみ	(濃み・ダミ) 染付彩色の技法の一つ。輪郭を線描きしたあと、太い筆でその内側に呉須をむらなく塗ること。
だみふで	線書きされた絵に彩色、ぼかしを加えるのを「だみ」といい、だむ人を「だみ手」、筆を「だみ筆」といった。顔料を多くふくむ大筆。
ぢずな	(地砂) 本窯に積むとき「ぬけ」が安定するよう正座に敷く火度の強い砂。
ぢづみ	(地積) 最下位の地砂のところに積む焼物、火度が最も弱い。「八荷入り」の陶土で作った(天草石10に対して8の割で弱い三股石を入れたもの)
ちょうか	(貼花) 貼付文様のこと。胎土と同じ土で草花などの文様を作り、これを貼りつけてから釉を掛けて文様としたもの。「てんか」は慣用読み。
ちょこ	刺身用醤油入れの小皿、刺身皿と一対となる。
ちんころ	山土で作った「かわせばま」をいう。
つちこなしいた	(土捏板) 製型前に陶土の空気を抜き水の含み具合を整えるため、こねまわすとき使用する台板、通常2尺角、高さ2尺5寸位4本足に作ってある。
つちふみいた	陶土が堅かったり、柔かすぎたりするのを調整するため、足でふんで混ぜ合せたその板、1坪位の大きさ。
てがしら	(手頭) 見本の焼物、1株の中から最も上等に焼けたものを選んだ。
てばち	(手鉢) 上部に弧状の取手がついている鉢。焼き物などの料理を盛るほか、菓子器として用いられる。万一の破損を考えての心がけとして、通常は手を持たないことになっている。
てんじょういた	(天井板) 棚積み(高さ8尺ぐらい約10段)のとき、最上段に蓋をする棚板をいう。
てんじょうざま	(天井狭間) 窯の天井に奥、中央、前の三ヶ所にあけた狭間、窯の冷却用。
てんじょうつみ	(天井積) 窯の天井近くに積む焼物、耐火度の高い「二荷入り」の陶土を用いた。
てんりゅうじせいじ	(天龍寺青磁) 中国元時代(1271~1368年)から明時代(1368~1644年)初期にかけて龍泉窯で作られた青磁。濃い黄緑色で、大型の花瓶や皿が多い。
どうぎり	(胴切り) 大きな木材を丸太のまま2.5~3尺に切ったもの、「焚き起こし窯」に詰め込み火をつけた。除々に燃やすため。
とうさい	(豆(鬮)彩) 染付で骨描したあと、赤、緑、黄、紫などを彩色したもの。中国明成化時代(1465~87年)に創立され、清の雍正時代(1722~36年)に鬮彩の名にふさわしい色彩美を展開した。
どうばん	(銅判) 薄い銅板に絵を刻み込んで、判とした。絵葉を塗って素焼に押しした。絵書きの手間を省くため。
とちみ	ロクロ細工のとき、ロクロに固定して、仕上げけずりの台とするもの、陶器製でラッパ状をしている。
とびせいじ	(飛青磁) 鉄釉による斑文がところどころにある青磁。中国の元~明時代(1171~1644年)にかけて龍泉窯で焼かれた。
どらばち	(銅鑼(羅)鉢・鉦鉢) 縁が切り立った平鉢で銅鑼のような形をしている。黄瀬戸の銅鑼鉢がよく知られている。
とりけ	(鳥毛) 焼物の埃を払うもの、鶏の毛で作ったハタキ。

用語	解説
とるこあお	(トルコ青)トルコ玉のような美しい青色を出す釉で、トルコ青釉、トルコ玉釉ともいう。エジプト、ペルシアの陶器に古くから盛んに用いられた。
とんばい	窯(登窯、素焼窯とも)築き用材耐火土を長方形に固めたもの、大きさは煉瓦の4、5個分ほど。モーロともいう。
とんぱん	成型されたものを天日で乾かすためのもの。3尺ぐらいの間隔に丸太2本を並べ皿板にのせて乾かした。工場内には内とんぱんが何段もあった。
なつつ	はまが動かぬよう、はまの下につけるもの。極上焼物に用いた。
なまがけ	(生掛け)素焼きする前の素地に釉薬を掛けて本焼きすること。通常は素焼き後に釉薬を掛ける。
にごしで	(濁し手)柿右衛門の磁器に見られる米のとぎ汁のような乳白色の素地のこと。普通の磁質には青みがある。
にじゅうこうだい	(二重高台)高台の畳付の部分に一本の溝が彫っており、高台の内側にもう一つ高台があるかのように見えるもの。
にゅうばち	(乳鉢)絵薬を調合して銀台ですり上げたものをさらに絵を書きやすくするためにすりつぶす陶器製鉢。内側に刷毛目があり釉薬はかかっていない。
にゅうぼう	(乳棒)にゅうばちで絵薬をすりつぶす陶器製棒。直径2糎位。このほか銀台の代りになるような大きなものもあった。先は陶器でつくり、柄は1.5mぐらいで、これを柱にゆるく結び付けて両手で廻した。
ぬけ	天秤積用の円筒形の柱、耐火土でつくる。天秤、シノ、焼物などの全重量を1本の柱で支える重要な役目をした。
ぬべら	(延べ籠)ロクロで成型するとき、陶土を延べ上げるへら。30糎ぐらいの長さで先が丸く曲っている。
はいかつぎ・はいかむり	(灰被)窯変した天目茶碗の一種で、灰を被ったような鼠色に変色したもののこと。灰被天目ともいう。
はけ	(刷毛)用途によって数種ある。絵書き用や、生焼物の水拭用その他。
ばじょうはい	(馬上盃)脚部を手で握れるほどに高くした盃のことで、小向に使われることもある。馬上盃ともいう。この名の由来は、馬に乗ったまま酒を飲むのに適しているからとも、腰が高く馬の上にいるようだからともいわれている。
はたる	陶石、釉薬をうち砕くこと、唐臼、踏唐臼、水車を利用した。
はま	やきものを本焼成するときには焼歪みを防ぐための台座。
ばんこ	焼き上がった素焼を取り出して、埃を鳥毛で払い除く時などに用いる台、木製で上面が畳1枚ぐらい高さ80糎ほど。
はんだい	(藩台)焼物を本窯へ運搬する箱、4角で深さ5寸位、幅2尺5寸位正方形、しゆるなわでひもをつけて、天びん棒でかついで運搬した。
ばんれきあかえ	(万曆赤絵)中国明(1368~1644年)末期の万曆窯で作られた華麗な五彩のこと。濃密な青花と五彩によってぎっしりと文様が描き込まれている。
ひあぜ	(火畦)あ行の「あぜ」と同じ。
ひいろ	(緋(火)色)素地中の鉄分が酸化して、ほの赤く発色してできた斑文。偶然にできるものと人工的に作られるものがある。
ひおこしがま	(火起し窯)焚き起し窯と同じ。
ひだすき	(火(緋)襷)無釉の陶器の焼成中に、藁灰が掛かったところが赤褐色に窯変したもの。近年は藁を巻きつけるなどして、人工的に作られることも多く、備前焼によく見られる。
ひどこ	窯の薪、たたらぎなどを焚く場所。
ピンホール	釉の表面に小さな孔が針の先でついたように出来たもの。釉中の成分が焼成中にガス化し、これが出た跡。まだ、器面に埃が付着したままの状態では釉したときにも出る。このほか、いろいろな原因が考えられる。
ふかせがま	登窯の最上段に附設された窯。本窯の余熱で素焼するためのもの。
ふくろもの	(袋物)壺などの、袋状になって、内部に空間のある形をもったやきものをさす。
ふせやき	(伏せ焼き)やきものの口辺を下にして焼くこと。器物の内部の汚れを防ぎ、歪みが少ない。
ふだがね	(札金)焼物の入札会の時、買手が入札単価を書いて投げる真ちゅう製の札。この札金に陶器用語の数字を書いて投げる。

用語	解説
ふちとりがわ	(縁とり皮) ロク口細工で成型のときふちを丸めるために用いる皮。牛皮、またはゴムを用いた。
ふとがきふで フリット	(太書筆) 絵薬を十分含ませて大きく書くときの筆、山水絵や大きな字を書くとき用いた。1200度以下の低温で焼くために、釉薬中に混入する釉材料。“白玉”ともいい、鉛白玉、無鉛白玉とがある。
ふんがらうす へら	(踏唐臼) 足で踏んで、陶石や石膏を砕く臼。米つきにも利用した。
べんがら	(篋) 用途によって種類が多い。ロク口細工用糸切り細工用、美術工芸用など。
べんざら	(弁柄) “紅殻”とも呼ぶ。酸化鉄の絵具。下絵付、上絵付に用いる。還元焼きで茶色から赤っぽい色に発色し、酸化焼成では黒くなる。インドのベンガルから転じた言葉。
ぼし	(紅皿) 女性の化粧口紅を塗り固めてあり、盃ほどの大きさの焼物。また、焼物の破片の別名でもあった。
まぜぼう	本窯で焼成するとき、完全を期するため焼物を一個ずつ入れるケース。近代は1個の「ぼし」に数個入れるよう工夫されている、耐火土製。
まどえ	(混ぜ棒) 手の平大の杓子形の厚板に穴をあけ、竹または木の柄をつけたもの。釉薬を底からよく混ぜるために用う。
みこみ	(窓絵) やきものの一部を釉で窓のように区切り、その中に山水、花鳥などの絵を描くこと。窓の形は丸、菱形、扇形などいろいろある。
みざま	(見込み) 茶碗や鉢の内側のこと。内側全体を指す場合と内側の正面または中央の底面を指す場合がある。見込みの作風は鑑賞の上で重要となる。
みしま	(見狭間) 窯の中の火の色をのぞき見する狭間。火の色で焼け具合を見た。目の高さの位置に横にあげた穴。
みずさし	(三島) 象嵌の一種で、白釉で細かい文様があるやきもの。朝鮮李朝時代前期に焼成された。名称の由来は、静岡県三島神社から発行されていた暦の仮名文字に似ているところからつけられたとされているが、「三島」が朝鮮を示す言葉だったという説もある。
むぎわらで	(水指) 茶具の一つで、席中に置き、釜に補給する水や茶碗をすすぐ水を入れておく容器。木製や金属製のものもあるが陶磁器が一般的である。同じ材料で作られた蓋(共蓋)がない場合は黒漆塗りの蓋をつかう。
むしくい	(麦藁手) 茶碗などの文様で、縦に細い線を何本も引いたもの。麦藁を連想させることからこの名がある。似たものに木賊文、干筋がある。
めいじん	(虫食(喰)い) 器の口辺部の釉薬が胎土に融着しないで、部分的に剥がれ落ちて素地土が見えるもの。古染付などにみられる。
めおとし	(銘印) 器物につけられた作者または窯の印。印を押しつけるかわりに、篋などで彫った銘や染付・色釉で書いた銘もある。
めすな	(目落し) 焼物の附着物などを取り除く鉄の棒、先端は鋼である。
めんとり	(目砂) 耐火土の砂。たて、ぬけ、ぼし、ばまなどに塗って融着を防ぐもの。
もうろいし もうろくだし	(面取) 丸く成形した器の曲面を篋などで削り取り、多面体にする。または直角の角を斜めに軽く削り取ること。
もっこうがた	窯(本窯、素焼窯)を築くときに使用する長方形の耐火土、トンバイの異称。物原ともいう。窯から出る廃棄物の棄場、昔ははま、もうろいし、破損焼物が多く棄てられた。
やきしめ	(木瓜形) 器の形の一つ。紋所の木瓜のように楕円の四隅が内側に窪んでいる形。あこだ形、四方入隅(角)形ともいう。
やすばい	(焼締) 信楽や備前など、釉薬を掛けずに、陶土をただ焼いただけのものをいう。高火度で長時間焼くため、土中の鉄分が赤く発色することが多い。
やつばね ゆうやく	(柞灰) 釉薬の光沢を上品に落付かせるために混入する柞の木を焼いた灰。最も上品用で、木の箱にいていねいに入れてあった。宮崎県から買っていた。
ゆうりきんさい	(ハツ羽根) 本窯で焼物を乗せる台。このほかに六ツ羽根、四ツ羽根があった。
ゆてきてんもく	(釉薬) 釉(うわぐすり)と同じ。
	(釉裏金彩) 普通の金彩が釉の上に金を貼りつけるのに対して、金粉や金箔の上に透明な低火度釉を掛けて焼きつけたもの。絵の調子が柔らかく見え、また、金が剥がれにくい。
	(油滴天目) 天目茶碗の一種。黒い釉面に金色や銀色の細かい斑点が出て、ちょうど水に浮く油滴のように見えるもの。

用語	解説
ようへん	(窯変)窯のなかで変化が起こり、形や色調に予期しない表情や色がでること。技術・研究の進歩にともない、現在では意識的に作られるようになった。
ようへんてんもく	(曜変天目)天目茶碗の一種。黒釉の地に、銀白色で周囲に青みを含んで輝く丸い大小の斑点が、群をなして浮かび上がり、さらにその周辺に虹色の光彩が怪しく取り巻く。原因は不明で、世界中で日本に四点伝世するのみである。
よほう らすたーさい	(四方)四角の器。 (ラスター彩)白地の上に、金、銀、銅を発色剤とする顔料で文様を描いたもの。光のぐあいによって黄金を含んだ虹色に輝く。イスラムの代表的な装飾技法。ラスターとはきらめきのこと。
りんか	(輪花)皿や鉢などの縁に規則的な切り込みや凹凸があり、口造り全体が花形になっているもの。
るりゆう	(瑠璃釉)酸化コバルトを着色剤とした青色の釉薬。器物全体に掛けた場合にこういう。主として磁器に用いられる。
ろうぬき	(蠟抜き)乾いた素地に溶けた蠟で文様を描き、そのあと全面に釉を掛けたもの。蠟の部分だけ釉をはじいて抜文となる。
ろくこよう	(六古窯)鎌倉時代以前より継続している古い窯を古窯の代表的なものとするが、その中でも後世大きな産地となった瀬戸、常滑、越前、丹波、備前、信楽の六つの窯をさす慣用語。
ろくろ わりざんしょう	(轆轤)成型に用いる廻転台、車ともいった。 (割山椒)山椒の実が熟して割れ開いたような小鉢のこと。独特の形状のおもしろさから秋の向付としてよく用いられ、三方の割れが深いものほど喜ばれる。

